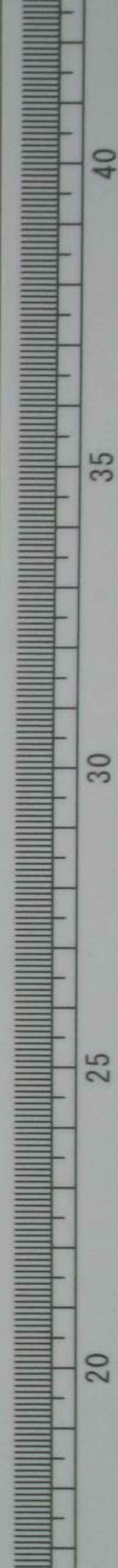


高利のうた

5  
1806  
2





祝  
此  
の  
子

乙  
冊





硯のつゝ下

春の郊



雪と中より先むらさきの鏡波外	嵐雪
出づぬや春とけちと天乃原	白峯
雪と小判のほし初る色	丹志
たけ柳やいそむしよせともふらし	米仲
けし海くると春のほくそと春のな	買明
同し葎拾ふや終素伝の中	樓川

⑤

草



法師のしる榊梅を世人も為  
湖十  
嘗て吉々甚れぬ年の秋  
紀逸  
春州の春を志しつゝお粘子日  
再賀  
馬や志る月影くゝを焼野原  
鶏口

ふくひ葉下ののむ自の茶焙酒  
甘棠  
小治のるを流きて夜み柳のふ  
蘭舟  
又見しお枝の先たもる蛙の乳  
臺簫

蝶々を思ふに女写れ手元まで  
立豊  
十行末の空と連し川梅の影  
團窓  
月影の刺さる日あり梅乃花  
旭和  
今様をい小神志るく田楽を  
故注  
幸逢や志るく一過して秋月  
蕩逸  
紅梅や逢ふ女乃乃方志るま  
再和  
紫の戸やある尋くも梅を  
在貫  
梅咲く和泉式部乃付不和  
萬貫



海棠は夢を破れく葉こころ  
 手折せぬさくら花待はる形  
 梅のよれ手元の園におよびし  
 やよれぬ系帯より彼岸くふ  
 七州おしりゆく去来の淡紫の  
 葛鹿と江戸のふりま葉摘  
 志く魚や舞よよせる糸のほ  
 着る日ひやちをばいのほり

徑 祥  
 龜 成  
 嵐 蘭  
 貞 嵐  
 丹 鳳  
 田 鳳  
 女 萱 薰  
 田 女

掬まれば雪のほる小結の  
 むぎの花中よふをわしとふ  
 挑さくや日おのる女らし  
 紫の戸は月も自らの梅を  
 春んと啼けり風の小やう袖  
 ふる魚は火とともれも然るな  
 風巾そまゝの乃衣一括を付  
 雪もや啼く血とて磯縁の寺

立 志  
 吟 市  
 團 窓  
 牆 立  
 立 豊  
 麗 来  
 丹 志  
 紀 貝



濡きて帆ハ見さし——春の雨 杜谷  
 湫戸物の清さよ刻々横波 茶外  
 あり向ん人知らぬ山舟波干涸 連尺  
 夕小舟人望立影さす山と九段 相重  
 傾城を海老よりくえる沙干如 團窓  
 さまる如接穂よんはく日のお 文里  
 其先も心を白ハ——花枝け 篤志

ちうさくは遠海を旅兄の詩よきつゝい  
 えきかたあふけ外通いあふを假して

おそる——花の坊主を言濃舟 立守  
 元よ唱る物の数あり風巾 紀貝  
 川上らうき世のおや挑乃茶 小田原 巴丘  
 色も白ひむつ——茶葉油 今 麥由  
 青素ありはらもこもはら雑音 今 芦翁  
 梅の枝や夏ち根中程おくら 今 竹人  
 うらひさむ朝りた岸よ小笹系 今 得魚  
 古柳や波とみくら花澄け 今 麦由



まきあがきとまき布は撮拍子 小田原 夢由

ほつころと小冊の欲の撮り形 全文明改 一路

若中や蝶の二葉いまこんらん 全 義松

蛙鳴うらみ扉こり表あか 全 和水

梅のあしきも通ふ窓の内 全 泉十

あな解むむのしなめし持持の蓋 全 麦由

禁うし一目とまき交撮りぬ 全 卓示

い春色(雪)乃何そ急もまわぬ 全 朱明

日比本の撮乃中こそ温撃像 大磯 麦由

あな花みんそ撮るはしも艸 巨勢伊東 貫古

起よく和ぬの梅はきさへ 全 松甫

若草み好あそびあたりぬれ約 全 和律

川汐よあはれ帯とくあ和布巾 全 松倭

ねやるあそび人の回まてさくらあ 全 季子風

あま花のやうもほろ記浮世水 全 立波

親猫もほろハ粒小柳のあ 全 松華



伊东少年

声細き家玉招き今昔松調

小籠あきる振う今昔し山さくら梅甫

蛙釣る者今昔さもろ川柳仙甫

舟車入りし折りし五列のふとを  
和歌乃浦一誘引し

汐子ぬい案内もあはれ今宇治松甫

織女も糸も末なる柳今友衛

人習乃吞そし今てやまきり赤城

天目ぬ酒の波来る汐干今和

枯柳飛て蛙乃ま今る音今五柳

山くはまをぬれ今る藤の花魯水

聖王廟奉納 題亀井戸

梅の香や飛て二百里白幣百拜丹志

初午南朝四百八十寺  
といつるら庵人の自漫を

初尔や幟今ら四千八百樹

く川年今の古の手拍今たり西今莖簫

初む今る也今花も今葉を今曳は今め今杜谷



初はまの也あまのあけく山つ  
 くのちや家と花とを拾乃奥  
 喜のあけつて悦き小てうちん  
 春の春利休の供を大工の乳  
 山里乃戸書ふ—— 蟹柳 菅温泉  
 握る手ぬきとさの結る蕨 皇烈三島  
 許すて手紙に送る時—— 芋  
 なるよえ—— 山と里ととさるるらふ

湖燕 芋花 秋湖 栄保 立豊 園窓 紀逸 紀貝

書岩のよとめと拾ち支柳のな  
 喜風よ撫をともとさるる柳  
 心さららるるあけつ津辺の斤便  
 石便りさるるあけつ津辺の斤便  
 常や川拾るるあけつ津辺の斤便  
 糸柳や柳の通いいとむらさ  
 人のまゝの端手ぬきとさるる  
 表は神の味香るるあけつ津辺の斤便

葉雨 谷橋 竹志 湫蝦 芦丈 枝蛙 演元 古停



之う短く鼻を何さるの猫は毒 園窓  
 者高し蛤洗ふ小家 鮓 丹志  
 何端一そ赤い風ゆく汐下 丹成  
 隠家よ敷く戸いふしそはる 理空  
 尾乃戸め物の云能ま彼居部 以水  
 後ひのちらよ指さ守あそ花部 臺梅  
 波風は人よもたぬ彼居部 紀貝  
 軟梅は藤くくくろは朝露部 紀見

川下へ梅の流れくそはる 紀逸  
 指は中垣法よて美乃山 田社

一とせり上野は吟中  
 五十番様の下乃横日ゆとせりもをや  
 ひとむのし十人跡和九人をむくたの  
 をさるそと云はれも和は 湯下登美乃  
 湯道の端を汚しやてあまもは  
 花より何とや明年とせり  
 懐蕪を記しはちり

花はうけく熱焔吹うれくおるなり 丹志  
 親の世と湯腰乃うる構の如 雪羽  
 菘は花ゆき月詠六歩相うき 紀逸



柳うらまきく柳うらまきそ 立豊  
抱くまき抱く手あはしのやま 紀逸

追他御文通句

三日月の橋入るの柳の那 小田原 磧水  
傾城の噴きき蛙可南 全 平芸  
陽のやまの名の射ぬ草も有 全 和楓  
出代や蜘蛛を連る山旭のけ 全 菊江  
咲を北山口ききよ一木うな 秘浦 巴水

葦乃部

古乃如一里一ねうんころる 買明  
庭をた声をくくるや本とくま守 葦蕭  
雨のそら傘へきをく部云 女 壺葉  
懐へ旭をほくす牡丹のな 立豊  
云かちみ小家の角やかこつふさ 紀逸  
あ一人ききせばめもわらたはさ 丹志  
灌仏やおそ後くうらぬあ乃味 湖十



明不のく元も奪あめ枯る 蘭舟  
 葉さくや象と歌ある廿日州 故注  
 女のくもあつて結衣初松魚 在貫  
 浪百うろ矢を射る魚舟の纏 田鳳  
 子まほと手入のさくく女 吟系  
 友笠のちし葉果つたわ係と我尻 丹鳳  
 兼糸花子孫之人さん之笠山 嵐茶

麻島の御山に片くーのくあまきよー  
 葉内町量りくうはる初衣まぬ女結る雪く

及下返る種めをさきさ葉が 藤  
 江島や行く戻る色初纏 文里

無他全自

筆此ゆめま出ー懐の春 旭和  
雲上院言舞古松山  
 咲乃るる寺やの川くの花夢 丹志  
 下の向く唱るは解わさ守 立豊  
 清風や石抄海まお新るま 紀見  
 男ともんくま女乃田極ふ 万貞



正月五日一日きり乃を記 耳棠

小女れ口上長一あやめ艸 桃鏡

竹の子やあつ肌ゆく者後ひ 貞胤

とほさゆる人るき里も水鷄外 雪羽

小学お朝起習へ合観の念 紀逸

系系猶く神もいやうなる 等志

写ると之多お少人あう五う兩 丹志

手は伸く短思りせて堂あ奈 立巻

浦をんお轡来る日や天津風 柱谷

山々と籬もお魚を其ひうら 露牙

此あ陽若也ふも壘す日お景 丹成

あはれ何しよなましきうてん 以み

う記料や初うはよある流一馬 紀逸

海あうく夏あかしく人泣おう 鶏口

木陰あく蜂の時多し日今 情立

空を漂る木と乃下地お蜂外純 紀貝

中村玄子の乃本草の移るうてせ



後世や蝶のつたのりら心太丹志  
日共書りて五まらと低し雲城  
漕知くくそて成何とて涼ふ  
夕とそ如表のきりたまる時  
田女

信長が書きたり

以ておては若る麦の手に抽のむ汁 連尺

天を希とて地取席とんかよおわく

善那ー並申てり山川をちむむ更井

とく寸はまき葉はみとるくこま井ひて能治と接ん

囀る秋く家よことおるそ長外 構川

能の画賛十

踏伸にほも涼しやをて雨 朱仲  
猿沢の月夜手よえる園のぬ 龜成  
兄弟の手にあ入るはしと一白 立守  
わいのたもをむ久しき茶外 茶外  
若くおをを鬼一口や保とてき次 古淳  
空とてお席子志ほる山さるま 貫古  
燃うのる葉く一鳴きうらんこ香 小田茶 麦由  
お乃おれしううまおいおぬく 朱明



音楽共例みひるまぬ牡丹系 小田系 巴丘  
 金のまぐ地をねをそてりん外 今 和水  
 故何らぬ折々地よ動う純 今 竹人  
 みーのおや馬もあとも都山 今 沼魚  
 鞠垣よよい善うのち反本立 今 嘉松  
 愛物を度へも愛そふ牡丹 今 平基  
 今月あやめこの能来もあま 今 麦由  
 よし曲たふやを男乃と人を坊 今 一路

夕のほや花も物りぬ垣根う 今 芦翁  
 川よ鳥やまたつめさる後ろ機 今 麦由  
 盲子と痛く戻りたり虫物 今 卓尔  
 新妻也教乃あるの物好 今 紫江  
 登りや一集きくしきる馬好流 今 和楓  
 涼きよ夕立ちる心籠枕 今 麦十  
 帆をうけて二舟道へ好暑 今 麦由  
 涼風和柳を出入所 今 碓水



本等と恵心此花もほえん 小田系 花外

夏夜の人和りき牡丹の如 今

山古の木立此すきく因植也 今

おもひねとぬや夫婦の田うの筈 今

深草乃枝折をさくぬ鶴外 今 寛光

世を捨る日如妻やうしこる 今 高賢

互和忘れ一歩の序一席の為 今

挑灯も語りともく堂より 福浦 巴水

旅山や浪よのうぬ花卯木 芦湯 栄保

宵の月もさゆる花古甲子 伊东 和伴

言を舞はきよもほくや今事外 今 可木

艸と木乃間を花のなきん如 今 秋夕

夏夜の一とや喜ぬ花流乃西 今 松甫

おもひやせしむる花乃一と下 今 松俵

君の代や人乃まことぬ葵草 今 松言

雪の華は能出るなり 今 桃甫



唄斗泥了 際ぬ田植うか 伊东直人 柏甫

墨待まて 雁うぬる雪の乳 今 可重

啼あけく 明のや花 蜀魂 今 左右

少る船よりの 尾を葉や今持夕雨多 今 葉南

山ちや 俣を二探ふる子 祝 今 松輦

とよ出く 雨を日ぬかたつを 細代 魯水

持教や 花ちた上 神なき次 今 友衛

池のちをさぬく 三すやあや黄 今 和久

家ひより 是いともさるる様 今 五柳

ふゆや ちみ銭せし 也言持声 三寫 湖燕

箕山み 冊烟とく 疾るり 今 芥花

さー 上て 欠流まや 五月雨 今 秋湖

卯の毛ぬ 海川 消て 庭乃月 今 谷橋

風陰の 体む 戸た 何のさ ち 今 竹志

竿や 幾羊 ぬお ぬを 控く 今 芦夫

虫干や 法すを ちし 入 禮州 今 枝蛙



坪石丹やうしんけーみろふ 三考 湫岨  
 押さふまふ山をふる 伊勢 散之  
 藻のふかや踏ぬく 鯉の尾志 杉雨  
 備仙や児の指さす 猿橋は乃 再賀  
 摺子や入日涼 交はく 名 杉谷  
 一斤の舟の手書や 蓮乃 嘉 祿祥  
 あつさ日ぬ 我助ひん しの 壺 雨 壺梅  
 明日、塙る 柳よきふは 異ふ 左 壺

田は沼み本線の 焚火の 何つさる 官路  
 夕なやるの 小祠も 川創り 春里  
 こころは 人形ん 雨は 杉雨  
 中よ 霧や 果は 流る 丹志  
 峯うら 八月を 吐出 杉川 田社  
 山伏の 向く 霧も 雲は 紀逸  
 丹志 一里 浦る 蓮乃 丹志

田と一不意の新地掃れえの池乃 櫻よ  
 朝うらぐちまの 葉のみうりよ 志まのぬ  
 池面 澄ぬ 二百里の 思ひを 可ぬ



秋

重はうりかみ物の星むく  
 二つ星をみてもんく長者外  
 又くあさん秋の初りは庭乃松  
 初風や松共秋始舞もせん  
 静水声よも何もの素木もて  
 子た等もを視ふ星を流ふ部  
 移つても思ひうけあさ海の

葦簫 丹志 鶯口 女 菴葉 相重 丹成 在貫

早合始候も移もうまて津石  
 移はる星へ手向乃切火の外  
 い左る戸やあのかまへ何れも  
 衣しれ簾の枝やきりくす  
 辻古也阿しと年や辻角力  
 みされ萩楊も流人東乃高  
 名ははくくあはぬ妹の柳外  
 初つ引是くし舞ある海の

田舎 篤志 春里 羅合 登社 丹志 杉雨 湖十



ちり霞の並そと形ひい葉山子か 買明  
 何をたてぬあしむるそ秋の夜 亀本  
 初冬かまこ山里六枚やりのあ 吾鳥  
 深州を煙の中かあ鶴このあ 万頃  
 鶴のそく毛えくしり女命を 丹鳳  
 後りのあく澄みそあ秋の色 立守

月

名月は何のああ毎ちる探る歌 井棠

名月や百月吹ぬそ息降し 立豊  
 ぬ月や々あを伸る州の女 紀貝  
 文うあきとこあきく後鳥 理忠  
 経井よあは流るあああ月 田鳥女  
 垣うあやああは月あ松一本 紀逸  
 一葉ある山乃透るあをほの月 牆左  
 柳子斗木よ暗し後乃月 丹志  
 ナニ初一あう星うあ尾長弘 田社



稀芳らぬ梅の宿材をほけり 連尺  
朝方濃く夕アハうはし秋の海 旭和  
風ようつろふ秋の喜阿つらひ虫 松雨  
舟も里を衣志くころり虫は音 吟糸  
秋風よ芙蓉の花の汐や水 文里  
初層如ふ以梅乃風入声 故註  
く形ひるも摘おされし聖業の 再和  
西儀く空蝶と名のし角力取 鶏口

すくも梅引袋く神さく 梅川  
市は日と夜もぬけらるる 紀造  
大比叡の子よきつるも 経得  
移す事の時くもえきる花はら石 官路  
旅大り里んく初てきぬく外 田出  
ハヤと疎あらぬ信の夢を神句 丹志  
志く昔もやあきもえせぬ花の底 老梅  
百州をほけりめとぬらぬ乃む 紀見



一いつあゝまらうまをまほし鹿の声 立豊

鹿

衣くや草鞋をくげん麻の露	紫舟
牝傑くんぬもよや鹿の声	露牙
捨袴ぬ川流きんり志のたぢ	延年
麻の角を何みくくま本の下	以み
海土おきくくけて鹿の鳴あふ	欠嵐
入る鹿をゆきまはるる老乃床	丹志

晦日け入日あゝらるゑをまの那	杜谷
学窓の朝日夕日にもまをうぬ	田且
片猿ま谷を照しるゑあかき	魚風
漆物乃杖の何れをまをけ	立豊
芝陰の影の影や鹿の音	貫古
坊舎のし程とちりる系隊ふ	竹人
橋のぬや藪をよるれけりる	巴丘
八羽や橋のすもまのふまを	麥由



白櫻のてら宮へしし月形歌 小田家 得魚  
 草摺如影を抱く山深き 全 朱明  
 文月如摺のうら照る水うみ 全 麦由  
 振袖を四丁めきと陣のな 全 一路  
 名月代時きふ人乃ち信入 全 范五  
 新と堀の静みききと一糸外 全 麦由  
 穂つまはさるもと人きと岩松 全 善松  
 和歌乃懐くききと橋の那 全 和み

松一本庵のちうしと秋時音 全 卓尔  
 野鳴や指拂いた穂むし 全 紫江  
 月代をささるとけける陣 全 和風  
 子に及れ陰く藤合の牝の月 全 平蕪  
 焚くも乃お染あてて新酒 全 麦由  
 夕まゝも伊達もそ抱か葉重 全 泉十  
 掃除く人庭にきふ人乃 全 寛光  
 穂つまはし一葉射るを柳 全 磧水



何新ふ糸ふ結も七りね萩 小田原 五原  
 新橋の舟か持の生二出れ 今 五湖 福備  
 新橋せ出れききん州乃原 巴水  
 折くちを那きん返る田刈 伊予 栄保 昔切  
 文月結封しねをきく一葉 伊予女 桺枝  
 是たなく乃詠いさき折梅 今 松甫  
 山嵐吹正しきり霧の幕 今 和律  
 角力場は木戸め似合ぬ柳 今 松倭

明くは月もえらきほれ月 今 立甫 今  
 鹿とて酒化せん菊の花 今 桺枝 今  
 片庭を枝とましく道松乃月 今 左右  
 名くやきき上まの椽の先 今 季風  
 初夕や櫓まき夜く女男結 今 松化 今  
 名月乃昼乃夜きき声 細代 魯水  
 花も咲く白きこの月さの葉の垣 今 友衛 今  
 明月に産りたる雁下町の草 今 和氷



梧はまは知のしきあつて間より 御代 五柳  
 早合やと水ひて牛の地ま 三帝 芥花  
 夕暮も林 合 暮はふし 合 如命 合 枝蛙  
 一葉みほし 合 初夜 合 夕 合 秋 合 芦丈  
 目をまよふ 合 心ある 合 今宵 合 秋湖  
 心の葉み 合 換へ 合 の 合 鳥 合 の 合 志 合 谷 合 稿  
 意 合 ころ 合 ち 合 ま 合 ち 合 暮 合 ち 合 ち 合 秋 合 竹 合 志  
 初雁 合 又 合 一 合 聲 合 づ 合 づ 合 里 合 を 合 し 合 湖 合 燕

照る月と新日向あつて 合 昔 合 松 合 の 合 松 合 湫 合 蝦  
 秋 合 の 合 也 合 隈 合 と 合 り 合 智 合 の 合 也 合 子 合 得 合 秀 合 里城

殘菊宴

丹志述

其 合 云 合 此 合 所 合 館 合 を 合 宴 合 傲 合 也 合 一 合 古 合 地 合 清 合 々 合 松 合 杉 合  
 庭 合 四 合 角 合 と 合 徑 合 甚 合 々 合 輪 合 丸 合 中 合 央 合 也 合 古 合 殿 合 也 合 松 合 木 合 名 合 花  
 成 合 極 合 也 合 庭 合 柯 合 を 合 入 合 ち 合 入 合 ち 合 して 合 飲 合 然 合 ち 合 酒 合 の  
 葉 合 ち 合 ね 合 び 合 強 合 け 合 ち 合 英 合 花 合 の 合 色 合 九 合 日 合 乃 合 無 合 事 合 惜 合 也 合

酒のめと湯み用く 合 葉 合 花 合 也 合 菴 合 菊 合



明皇はるる一雨やき久の露 紀逸  
先き社と舞くまきう瓶乃菊 丹志  
乱菊や出不迷く小市は口 杜谷  
ききとくつる物や菊はも 紀貝  
各法酒よみあふ破後園も出ぬ指く女  
あふあふ一葉を枯くく女あまのけし物も  
あふく涙を染ちまへ乱れ菊の花も隠し  
るくあふく涙のま下葉をこぼれ一葉も

道はもつげ碓町女及あまらり

あふく一葉を枯くく女あまのけし物も 丹志

秋のま久く秋林葉條とく初草もこま  
まみ菊風乃掃くあはくを打拂ひ斜陽の  
かこくすを向く代く木村とる人海あり  
人今もあふく一葉を枯くく女あまのけし物も  
世あはあまのけし物もあはくを打拂ひ斜陽の  
換くあはあまのけし物もあはくを打拂ひ斜陽の



寂し鹿柴趣 客少浮園曲  
靈草生苔地 珍禽鳴樹頭  
遙向樵夫嘯 應有羽人拖  
好是忘憂外 丹丘何處求

吹簫

衣冠清氣遠 壺裏秋光好  
竽の吹も二夜めハ隠れ地ハ好 蕭逸  
峰の深さハ人もあまを危ハな 菊貞

ある人も扇やけ精や秋乃香 茶外

赤城眺望

おたのしみは秋はくや精の純 壺著

菊有秋色 秋電の聲

秋秋も精もきく能く純の神 丹志

追加

稲穂も谷へるけ也華乃松 百義  
生々鯛のうらを汲せしは如月 葉舟



内へあるをを智るは初一れ 葦葉  
 中へ濡るくは着る所の物時ふ計 丹志  
 口切やまおれ粉ふ后乃西 湖十  
 中右のしはもやるもめの初志は 丹智  
 くらちまぬお糸のくや初時ふ 牆立  
 あし書をを思く情くは時雨ふ 内鳳  
 冬とつは春をいへる那ふ外 茶外  
 是智れ出るほくくは春葉外 左豊

出とのみは籠り枯物屋北山 紀逸  
 あらしは春はまきくは初意 杉雨  
 初をねや思ふもくは初葉の局 魚風  
 法うも今あ人よ初をさの時外 理虫  
 百性尔見ふ多子志くれの外 卯雲  
 水多乃論よとくは日向の外 杜谷  
 蛤如春やゆあふをくも 一布  
 衣くの外あぬの神中暖ある 萬貢



初雪を白きことの降神路山 耳棠  
 夕まゝおるれ食やうまを冷 旭和  
 風色柳と鳥もつとあふ 亀成  
 校川や帯あつて枯神原 紀貝  
 孤しく舞や梅のあつとる 文里  
 と川をた涿とらぬやたき 嵐蘭  
 初もとも八葉出しおさうま 田鳥  
 おりらも雪んあうぬ玉子酒 吟市

茶のふよみおしこう  
 雪は日也松のふよみ飯をうま 田社  
 初もとも八葉出しおさうま 立守  
 氷さるもおのねを團お水うま 紀逸  
 おもふけおせしほ家のあつとる 立豊  
 岩のつと二階とあふや智まぬ 丹志  
 おもふけおせしほ家のあつとる 梅川  
 雪も月や積み返るも積乃靴 鶏口  
 起くや斤子飾りくまのね 茶香



雪をゆきくさるゆしそ忌き海舟 買明  
 意路舟人別ぬおのこころ女 甚々  
 初雪やをきみ信つ角をさる 丹志  
 くのゆきより水互層の忘れり 築来  
 本合の暈もろくろとる茶水 欠氣  
 為水や揚紙紙るうろと壺 方頃  
 草足袋の口切違やぬいさ得 田且  
 心とゆきか旅のわとんおあすも恋 祚祥

表れきこころと理と思ふ氷外 春里  
 菊の新己の枯くも水枯る 相重  
 月の輪ぬまに流るや東無幾 官路  
 一ひ炬火袖抱空懐や詠白契 雪羽  
 手と下れ詠少く直ちそ旅の毛 紀見  
 山寺より木畑折るおききさ 甚梅  
 雪をまき雪もくさ気懐引枯地如 蒨逸  
 餅花をゆきくさるの極の能うれ 故註



中一の市誘ひ出るや大男 在貫  
 将業や加よりあるをちの州大城 貫古  
 紫衣のたのめれよと志されし小田系 巴丘  
 初まおや森は鳥の涙る内 麥由  
 雨おせ舞も纏りたる形て 朱明  
 和らに琴は指南も時る外 竹人  
 陸つともおあもの聲をまおあし 得魚  
 空うらやまよる成る年童や 芦翁

木のりも谷へ埋める積の声 今 麦由  
 おかじやまも結りぬ猿乃春 今 一路  
 風のあこえ月乃名跡うか 今 麦央  
 投入も一樹の陰や冬くも 今 義松  
 春花おや鳥一まふ日と結る 今 巴丘  
 遊るたのめや若のそ業おある風結若 今 麦由  
 海くこのう結おはれおまふ乃 今 卓尔  
 みる川お濁おるをく柳お 今 磧水



降揚の力もくく川方根安 小由系 平菱  
 志くもくも柳も拂いたる花言 全 紫江  
 偽まは昇をまてやるひし律 全 和風  
 家の内く捨よそのを様拂 全 和水  
 老の所と棠蝶の尻やみそ 福神 巴水  
 此香をくをみまてく 伊东 松南  
 空を舞めもまふく 全 和律  
 雪の化粧もふりむ柳 全 松倭

無乞の個子粒く花事れ梅 全 桃甫  
 ちりまふも 全 松意  
 初春や以目甚守し 全 左右  
 霜除や花の實 細代 友衡  
 年々 全 五柵  
 初春 全 和水  
 帆は 全 魚目水  
 空 三島 荇花



水鳥三鳥おとけくねあや新日乾 湖燕  
 炭竈の煙を毛修む先落ふ 竹志  
 むゆやうき世のむ乃詠を嘆 谷撫  
 辛穡乃松木化粧初一純 秋湖  
 暖うか隠居の座やう了む 枝蛙  
 貯くくみ葉れ噴や時雨元 湫蝦  
 隠るも花のふ地也兼ふれ短 芦夫  
 本つりし山木喜るれき大雄引 菜兩

初雪如海定まる庭乃井 岩嶽 得秀  
 管竹ふいふのく更るふる部 立豊  
 為城あめ上下手別巖岩山 百義  
 初雪如松隱るぬ海あけ 麦兩  
 伊予乃新神道よ吹簾やる此詠 篤志  
 ぬるぬ枯るる存子井一筏 一布  
 風く簾もくゆるの神乃る 羅合  
 若も葉を散くく冠れ海うふ 因岱



物つゝのひも佛よりぬき念仏  
以水  
季のそ尾日本晴花標をこひ  
丹成  
周お東の梅を揮や鉢をこひ  
登社  
年の尾も乱さぬ路のあな  
百義  
大とくお人乃公お法被川  
連尺  
貞徳の少し袖出ぬぬの智  
紀逸

成事年尾

大二十日言お乃松とよは見え  
丹志

季積んく切あり切のまゝお人よきく  
おく中居のぬお又茶飯好は酒を  
甘んを祝階を嵐雪みおしお札おみり  
寐念念の習も机持おおへん孝院の生を  
おのつゝの友もく編集はあはれ  
東武にお向より宝曆をぬぬをこ敷き  
今お祝の代を誦く七十二歳のまのぬ  
情をいひいひおぬぬおぬぬの



之しおほきもあはれしをえらみしに  
お波乃 終ありとも 後よはしるし  
何しと 其ふ枝の 用はきよし  
硯田舎りうと

徳均庵

甚と 蕭



*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

宝曆五年十月 二都松葉軒 萬屋清兵衛



